漱石山房

漱石山房記念館だより

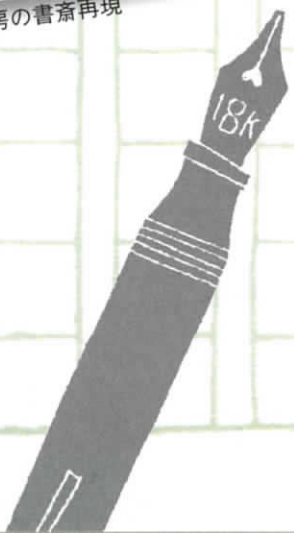
第1号

令和元年9月15日発行

CONTENTS

特集 【対談】漱石山房記念館 開館2周年によせて …… 2
名誉館長 半藤末利子×新宿区長 吉住健一
漱石山房記念館所蔵資料の紹介 …… 5
夏目漱石原稿「「土」に就て」
特別展報告 …… 6
活動報告 …… 7
INFORMATION …… 8

漱石山房の書斎再現



漱石山房記念館外観

特集

漱石山房記念館 開館2周年によせて

対談 conversation

名誉館長 半藤末利子 × 新宿区長 吉住 健一

漱石山房記念館について

半藤 あっという間に、丸2年経ったのですね。

吉住 もともと空襲で全て焼けてしまい、戦後、都営住宅が建ち、その後、区に移管されて区営住宅が建っていたので、なかなか再現計画というのが進まなかったのですが、その中で関連する資料を、大変多くの方にご寄贈いただきました。半藤様にも大量の資料を頂戴し、感謝しています。ご遺族の方や漱石愛好家の皆さんのご支援やご寄贈がなければこの記念館はつくることができませんでした。本当に様々な方の思いを実現して、今のところ順調にお客様にお越しいただいています。アンケートも比較的よい評価をいただいていますので、まだ改善すべき点はあると思いますが、ちょっと安堵をしたというところがあります。

半藤 実際にできるまでは、私はできないと思っておりました。ですから、できたときにはものすごく驚きました。そして私は起工式のときに初めて実感したのです。皆さんのお力なんですけれども、区が絶対的にこれを建てるんだという信念のもとにでき上がった記念館だと思いました。私が「そんなものをお建てになったって、場所が悪いし、人は来ないし」というふうなことを申し上げましたら、私の言葉をはね返すように区長は、「漱石は新宿区の宝です」と一言おっしゃった。その時私は区長の並々ならぬ強い決意と信念を感じ取り、もしかしたらイケるかも、と思いました。

夏目漱石の魅力について

半藤 漱石は、デビュー作の「吾輩は猫である」とか「坊っちゃん」とか「草枕」、この3つは40歳になる前に書いておりますよね。学校の先生をしながら書いたものがたまたま当たったというわけです。彼が小説家になるかどうかの決断を迫られたのは、朝日新聞から誘いがきた時で、彼は40歳でした。40歳から10年ぐらいしか彼は生きていませんから、大まかに言ってその10年間に10作の長編小説を書きました。

それら作品の一つ一つが全く違うんですね。作風も違えば、文体も全く異なるものを10作書きました。こういう作家はほかにはいません。恐らく外国にもいないんじゃないかと思いますね。それもものすごく大きな10作、全く違う小説を書くということは大変なことです。1つ書き終えてほっとする間もなく、次にまた全く違う新しいものを書こうという、挑戦的な創作意欲といいましょうか、そういうものを持った作家でしたから、それはもしかして小説家としての漱石の第一の魅力であったかもしれません。

それからもう一つ、漱石という人は日本語、漢語、英

Profile

半藤末利子（はんどう・まりこ）
昭和10（1935）年、東京生まれ。上智大学卒。エッセイスト。平成29（2017）年9月、新宿区立漱石山房記念館名誉館長に就任。父は夏目漱石門下の作家松岡譲、母は漱石の長女筆子。夫は昭和史研究家の半藤一利。六十の手習いで文章を書き始め、著書に『夏目家の糠みそ』『夏目家の福猫』『漱石夫人は占い好き』『漱石の長襦袢』などがある。

Profile

吉住健一（よしずみ・けんいち）
昭和47（1972）年、東京都新宿区生まれ、新宿育ち。日本大学卒。平成15（2003）年5月新宿区議会議員に就任（2期）、平成21（2009）年7月東京都議会議員に就任（2期）、平成26（2014）年11月新宿区長に就任し現在2期目。

語の3ヶ国語を駆使することができた、たった一人の日本の作家ではないかと思います。そうしたところも大きな魅力だと思います。

吉住　「彼岸過迄」が、章ごとに登場人物、主人公が違っていて、最後に物語の謎が解けるという、今でも通用する作風です。ご本人もああいったことを試しにやってみたと書かれています。すごくチャレンジ精神があり、好奇心の旺盛な作家だったんだなというのが、今の半藤さんのお話を聞いて感じました。

「道草」は、自分の気分が悪くなってお腹が痛くなる話になってみたりとか、精神状態も現しながら塩原家の養父母との関係のこと、塩原家と清算していくまでの過程など、自伝のような作品ですけど、違う作品を読めば読むほど本当にいろんな作風で、同じ作者が書いたのかと思います。

あと、今でも通じる読みづらくない文体ということですね。「草枕」を初めて読んだときは、学生のときに数ページで断念してしまったんですけど、大人になってから読んでみて、すごくすっと読めていきまして、現代でも通用する文章ですね。

半藤　文章が通用しますよね。そういう普遍性というものもあるということがやっぱり大きな魅力だと思います。難しいから嫌だと言って読まない方もいらっしゃると思いますけれども、私は読みやすい作家だと思います。だから、それが多くの人を惹きつけたんだろうなと思います。

吉住　また、子どもから「こころ」についての質問の手紙が来た時、漱石先生が「小供がよんでためになるものぢやありませんからおよしなさい」と書いたとか。

半藤　率直な人ですね。

吉住　記念館で、この間まで「「土」に就て」という長塚節と漱石に関する展示をやっていたんです。あの「「土」に就て」という文章を書くときも、頼まれて引き受けたけれど、病気になってしばらく書けなかったので、ようやく書いたということだとか、学習院に講演に行く約束をしていたら病気になったので、もう無い話になったと思ったら、やっぱり呼ばれたので、約束を果たすために来ましたとか、大病をされても必ず約束を一つずつ果たしていかれる、そういう人間的にすごく律儀な方だったんだなと思います。

半藤　ものすごく律儀で、ものすごく責任感の強い人です。ですから、晩年に病気になりまして、朝日新聞からは多額のお金をいただいているわけです。それも全部自分で契約したんです。

そして、印税というものの制度をつくったのは漱石です。それまでは、適当に出版社がお金を作家にあげていたんですが、英国から帰ってきた漱石は、それでは駄目だということで、契約社会というものを初めて出版界に取り入れたんです。ですから、今自分はこれだけのお金を欲しいと言って、権利を主張したからにはすごく義務を大切にする人で、自分が病気で小説が書けないので長い間新聞連載を休みますよね、それに対して本当に申しわけないと絶えず思っている。ああいうところも漱石の魅力的な人柄かもしれません。

吉住　そうですね、必ず約束を果たしていくというところですね。

半藤　漱石は、小学校のころから養子の問題とかいろいろ苦労や嫌な思いもしたのに、自分の実のお母さんが大好きですごく慕っていた。お母さんのほうは恥かきっ子だからと言って、公には自分は母じゃないというふうな顔をしているわけでしょう。それなのにその母を慕ったりしている。嫌な思いもしたかもしれないけれども、曲がったり、横道に逸れたりせずに、ただひたすら勉強をして小学校から優等生になった。本当に素直な人だと思います。

吉住　私は、漱石の明治34（1901）年3月21日の日記で、「牛ノ如クセヨ」とか、「誠実ニ語レ摯実ニ行ヘ」という、あの文章が好きなんです。手紙でも、久米正雄さんや芥川龍之介さんにも焦るなと。とにかくじっくり力を蓄えていくんだということを書いています。

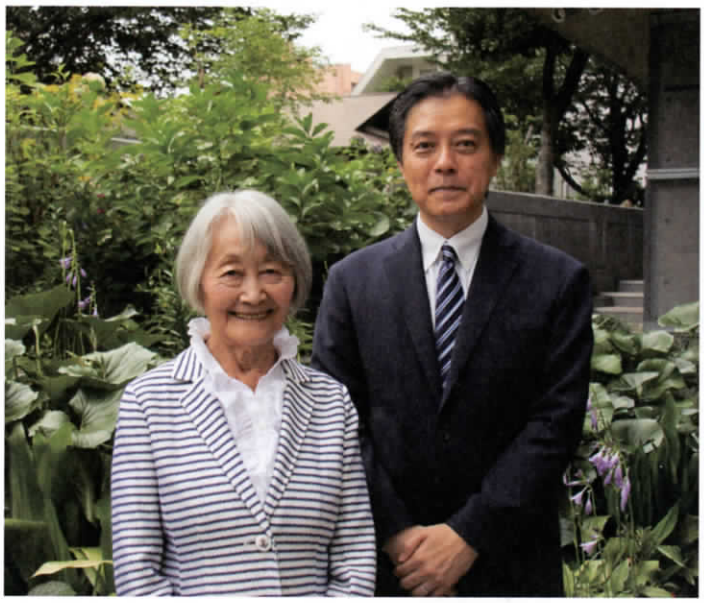
さっきの日記の前段のところが、イギリスとドイツがいつまでも世界で一番だと思っていても、ギリシャやローマだって滅びたじゃないか。日本がロシアに勝ったからといって浮かれていて一等国になったつもりでいる。これは決していいことにはならないというのがあります。

それがまた、今度はお手紙であったり、さらに「三四郎」の汽車の中での会話にも「亡（ほろ）びるね」という台詞があっ

たり。あの辺のものが一貫して、おごってはならないし、焦る必要はないし、急激に西洋のまねごとをして一等国になったつもりになっているといけないんだと。そういう倫理観というか、人間が伸びていくための必要な時間をかけなくてはいけないという発想があり、教育者の面もあったのかなと思います。

半藤　そうですね、俳句の中に「木瓜咲くや漱石拙を守るべく」というのがございます。その意味を突き詰めてみると、不器用でもいいからこつこつと努力をして、生きていきなさいという、ちょっと教訓的に過ぎますけれど、そういう句だと思うんです。「生き方上手になりなさるな」という意味だと私は思うんですね。

上の人にお世辞を使って出世しようとか、権力におもねるとか、そういう気が全くなかった人なのだと思う。とにかく努力、努力で来た人ではないかなと思いました。



吉住　今はＩＣＴを活用したコンピューター教育が進められていますが、知識だけどんどん吸収して万能になったつもりになって、基本的な身の回りのことですとか、人との関係づくりだとかができなくなる結果を恐れています。

そういう意味では、夏目漱石という人がこういう思想を持って、こういう生き方をしたんだということを、ここに来てもらうことによって少しでも新宿の子どもたちに理解をしてもらい、その後に高度な知識を身につけてもらえるようにできたら、なんて思います。なかなか交通の便が悪いので、すべての児童に記念館に来てもらうというのは難しいですが、記念館の意義はこれからの時代を生きる子どもたちに何かを感じてもらうところにあると考えています。

半藤　それでも来てくださるんだったら、ありがたいことだと思います。でも、本当に大事だと思いますよね。漱石はやはりおごり高ぶっていない人だと思います。そして、おごり高ぶらないようにというのを、私は一つ一つの小説に込めて書いた人だと思うんです。

「吾輩は猫である」は日露戦争の真っただ中に書いた小説でして、日本はその戦争に勝ちましたから、やっぱり勝利の美酒に酔いしれていて、足元をよく見ていなかったんですね。戦争をしたおかげで日本は貧乏になっちゃったんですよ。だから、戦争には絶対に漱石は反対です。日本は、勝ったということでうぬぼれ、のぼせ上がっていたわけです。そういう歪みを「吾輩は猫である」の中で厳しく批判しています。漱石は明治という時代を徹底的に書いた作家です。

漱石は明治33（1900）年から二年間ロンドンに留学しましたが、日本中が国造りの見本として仰ぎ見ていたその時代に、おごり高ぶったが故に繁栄のピークから落ちてゆく大英帝国の衰退を彼は逸早く察知しました。そして産業革命後の、人間が機械によって支配されていく社会の行方を深く憂慮しました。

こうして漱石はイギリス留学中に豊かな感性で磨き上げた鋭い文明批評眼を、彼の作品のことごとくに行き渡らせています。市井の一個人の生活から世界の大きな渦が見えるような小説を書き続けたのです。ユーモア小説と言われる「吾輩は猫である」、痛快青春小説と言われる「坊っちゃん」、一見息抜きの遊びと思われている俳句小説「草枕」の中にさえ、〝日本は、日本人はこれでいいのか〟という現代に通用する問いかけを随所に込めています。だから時代を超えて広く読まれるのではないでしょうか。

漱石山房記念館への期待

半藤　もう少し特徴を出していただきたいなと思っています。

例えば、この記念館でしか買えないというお土産品を用意していただくなど、色々なアイディアが必要です。

吉住　そうですね。最初は目新しいので来てくださった方が、だんだん足が遠のいていくという、タイミングがいずれは来るのではないかと思いますが、そのような事態を招かないようにしていきたいと思います。半藤家からご寄贈いただいた所蔵品の展示や、魅力のある身の回りの品などを少しずつでも集めていくことによって、半年ぶりに来たら違う物が置いてあったとか、違う展示をやっていたなど、絶えず愛好家の方とか、漱石ってどんな人だろうという初心者の方も含めて、来てよかったなと思ってもらえるような魅力を絶えず発信できる記念館の運営ができたらと思います。

今後も名誉館長のご意見をお願いいたします。

半藤　ありがとうございます。今後ともよろしくお願いいたします。

漱石山房記念館
所蔵資料の紹介

No.1

夏目漱石原稿「「土」に就て」

漱石山房記念館が所蔵する数少ない夏目漱石の直筆原稿の中に、「「土」に就て」があります。「土」は、長塚節が『東京朝日新聞』に明治43（1910）年6月13日から11月17日まで、途中、利根川水系水害の影響による休回をはさんで、151回連載した小説です。この小説は漱石が節に依頼したもので、漱石の「門」連載終了後に連載が始まりました。新聞連載後、漱石の著書をすでに数冊出版していた春陽堂から、明治45（1912）年5月15日に刊行されました。

その際、序文として掲載されたのが「「土」に就て」です。この序文は、節が漱石に面会して直接依頼したものでした。新聞連載中の評判が芳しくなかった「土」に対し、節の歌人仲間であった岡麓が尽力し、漱石の序文掲載を条件に春陽堂が出版することになったのです（「解題」『土他』〈朝日文庫〉昭和25（1950）年5月）。節は新聞連載の依頼をしてくれた漱石に対する思いを胸に、序文執筆依頼に出向いたのではないでしょうか。

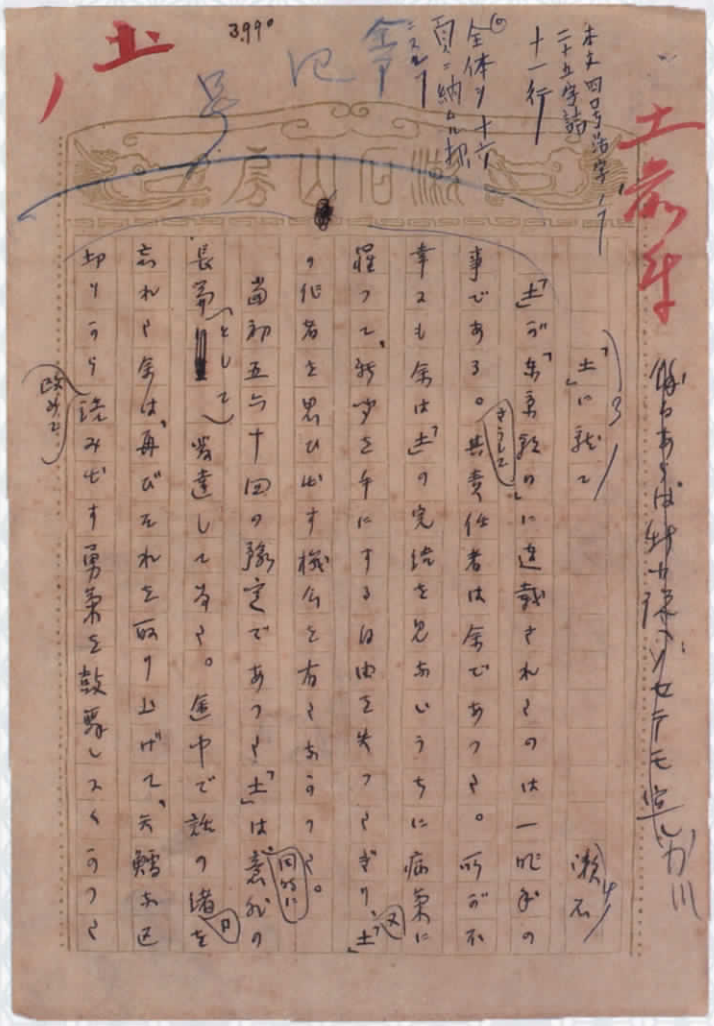
原稿は、橋口五葉がデザインし、「漱石山房」の名が入った、縦19字、横10行の専用原稿用紙全21枚に書かれています。原稿と『土』に掲載されている「土」に就て」を比べると、明らかに異なっている個所があります。本年2月に刊行された『定本 漱石全集』第16巻（岩波書店）では原稿にそって訂正され、訂正箇所は後記の中に列記されています。小森陽一氏の注解では、原稿執筆後に漱石が校正した可能性も指摘されています。

また原稿を見ると、漱石は執筆中、または執筆後に加筆、訂正を加えていることがわかります。例えば、長塚節の自然描写に関する文章の特徴について、その独特（ユニーク）なことに敬服しつつ、「あまりに精細過ぎて、話の筋を往々にして殺して仕舞ふ失敗を歎じた位」としながらも、「彼は精緻な自然の観察者である」との文を追記しています。

当初、序文の執筆依頼をされた漱石は、「彼岸過迄」を執筆中であったため、その執筆が終わった後に前後半日と丸一日かけて「土」の校正刷りを読み、この原稿を書きました。すでに節が喉頭結核にかかっていることを知っていた漱石は、序文の後半に、出版の時機に遅れないでこの序文を書けたことを喜んでいます。書籍として刊行される直前の状態を知ることができるこの原稿を見ていくことで、漱石が節と「土」についてどのような思いで序文を書いたのか、よりリアルに感じることができるのではないでしょうか。

なお、本原稿は「夏目漱石記念施設整備基金」を活用し、新宿区が購入した資料です。基金にご協力いただきました皆さまに、あらためて御礼申し上げます。

（漱石山房記念館館長　鈴木靖）



「「土」に就て」原稿

特別展報告

漱石山房記念館で今までに開催した２つの特別展についてご報告します。

漱石山房記念館開館一周年
松岡・半藤家資料受贈記念特別展
「漱石追慕のかたち 漱石、筆子、そして松岡譲」

平成30年9月22日（土）～11月25日（日）

当館の開館に際して半藤末利子名誉館長から多数の資料が寄贈されました。当資料は、漱石の長女で半藤名誉館長の実母である筆子が愛蔵していた漱石の自筆資料や、漱石門下生で筆子の夫となった松岡譲に関連する資料など多岐にわたります。資料整理をする中で、未公開資料も多く含むことがわかりました。本展は開館1周年に際し、その速報を紹介しようという趣旨で企画されました。

松岡譲は、芥川龍之介、久米正雄らとともに漱石最晩年の門下生にあたるため、漱石の最晩年に焦点を当てるとともに、松岡、芥川、久米らの交流、漱石没後の夏目家を取り上げ、「初公開の資料から」「晩年の漱石が語りかけたもの」「漱石と第四次『新思潮』の若者たち」「芥川と松岡をつなぐ手紙から」「夏目家の人々」の5コーナーで紹介しました。

筆子が愛蔵していた資料からは、漱石の家族への愛情が、また、松岡に宛てられた書簡や、関連資料からは、漱石没後も師を慕う門下生たちの想いが伝わったのではないかと思います。

その他、漱石の「則天去私」の解釈について石崎等氏（立教大学名誉教授）に、今回初公開となる漱石旧蔵書（洋書）や、戦前に刊行された『漱石遺墨』『漱石遺墨集』について中島国彦氏（早稲田大学名誉教授）に解説を執筆いただき、パネルで資料とともに展示しました。

今回寄贈された資料は1,000点近くあり、現在も整理作業が続けられています。今後も新しい成果を展示等で紹介していく予定です。

特別展会期中の記念講演会
「孫から見た夏目家」
日時 平成30年10月21日（日） 14時～15時30分
講師 半藤末利子氏（漱石山房記念館名誉館長）

漱石山房記念館特別展
「漱石と鈴木三重吉 広島の加計正文との交流を軸に」

平成31年3月19日（火）～令和元年5月6日（月・休）

児童文学雑誌『赤い鳥』を創刊した鈴木三重吉は、同誌を通して今も人々に親しまれる童話・童謡を数多く世に送りだしました。青年期には漱石門下生となり小説家として活動し、晩年は新宿に暮らしています。

東京帝国大学在学中に短編小説「千鳥」を発表し、漱石から「三重吉君万歳だ」と高い評価を得た三重吉。その喜びや苦悩を打ち明ける存在に、郷里・広島の親友で、共に東京帝大で漱石に学んだ加計正文がいました。本展では、加計家が所蔵する三重吉から正文に宛てられた数多くの書簡を中心に、第一章「漱石との出会い」、第二章「漱石門下生として」、第三章「そして『赤い鳥』へ」と題し、いくつもの初公開資料とともに紹介しました。

第一章では、大学で漱石に出会い、デビュー作「千鳥」を発表するまでを紹介しました。会場入口で展示した、漱石の肉声が録音されたロウ管とロウ管式蓄音機は、正文と漱石の関係を示す資料として大変貴重です。録音は正文の希望により実現したものですが、残念ながらロウ管の劣化により現在は再生不可能。しかし、正文が残した記述からは、録音時の様子が鮮やかに浮かんできます。第二章では、旺盛な三重吉の創作活動を、木曜会の様子や漱石との交流などとともに紹介しました。第三章では『赤い鳥』の活動を、漱石や新宿にゆかりのある人物の作品とあわせて紹介しました。

本展を通じて、生涯、師・漱石への尊敬の念を抱き、創作的活動への意欲を持ち続けた三重吉の思いとともに、三重吉と正文の変わらない友情を見ることができました。

特別展会期中の記念講演会
「鈴木三重吉の文学的出発をめぐって」
日時 平成31年3月31日（日） 14時～16時
講師 中島国彦氏（早稲田大学名誉教授／日本近代文学館専務理事）

「漱石山房と鈴木三重吉と『赤い鳥』」
日時 平成31年4月20日（土） 14時～16時
講師 宮川健郎氏（武蔵野大学名誉教授／大阪国際児童文学振興財団理事長）

特別展図録『漱石と鈴木三重吉』好評販売中！
定価７００円

活動報告

漱石山房記念館で開催した展示・イベントについてご報告します。

展示報告 《通常展》テーマ展示「そうせきさんってどんな顔？」

令和元年 7 月 9 日（火）～9 月 8 日（日）

夏休み期間ということで、漱石の文学作品にあまりなじみのない小中学生の方にも楽しんでいただけるように、漱石の子どもの頃の写真や、お見合い写真、弟子に送った猫耳の自画像、切手やお札、デスマスク（複製）など、さまざまな漱石の顔を集めて展示しました。

髪型やひげの形が変化していることや、描く人によって印象が異なることをご覧いただけたのではないかと思います。

また、映画のプロモーション用に日活株式会社が製作し、NPO 法人漱石山房の所有を経て新宿区に寄贈された「夏目漱石人形」も展示しました。8 月 10 日（土）と 17 日（土）にはワークシートを用いたギャラリートークを開催し、多くの方にご参加いただきました。

展示室にはおえかきコーナーを設置し、500 名以上の方にそうせきさんのお顔を描いていただきました。皆さんの作品も展示させていただき、華やかな展覧会になりました。ご来館、ご参加ありがとうございました。

夏目漱石人形

ギャラリートーク

会場風景

イベント報告

子ども向け アルバムづくり教室

令和元年 7 月 27 日（土）

手製本家のアビコノコ氏（abc bookbinding class 主宰）を講師にお迎えして、小中学生を対象としたアルバムづくり教室を実施しました。金魚や朝顔などの模様の和紙や、針と糸を使って製本を体験しました。小学生には少し難しい作業もありましたが、夏休みの工作課題や、家族へのプレゼントにしたいと全員が頑張り、アルバムを完成させることができました。

俳句入門講座

令和元年 7 月 28 日（日）

俳人の大西朋氏（俳人協会幹事・俳句結社「鷹」同人）を講師にお迎えして、俳句入門講座を実施しました。漱石公園を巡り、題材を探して、実際に俳句を作りました。最後は句会を行い、それぞれが作った俳句を鑑賞しました。小学生から 60 代まで幅広い年代の方にご参加いただき「初心者でも参加しやすかった」と好評でした。俳句に関するイベントや講座は、今後も企画したいと思います。

CAFE SOSEKI
カフェ・ソウセキ

CAFE SOSEKI では、明るく爽やかな雰囲気のなか漱石ゆかりのメニューを楽しむことができます。漱石の作品や関連書籍を手に取りながら、ゆっくりお過ごしください。
営業時間：10 時～ 17 時 30 分
（ラストオーダー 17 時）

●おすすめメニュー
空也もなかセット　648円（税込）
漱石作品「吾輩は猫である」に登場する銀座の老舗和菓子屋 "空也"。有名な "空也もなか" は今でも銀座の店舗で丁寧に作られています。

●新商品のご案内
1. ミルクベースでなめらかな口当たりの宇治抹茶アイスクリーム 540円(税込)
2. 創業 450 年の歴史をもつ宇治の茶舗 "上林春松本店" のアイスグリーンティー 486円(税込)
3. 一杯ずつ丁寧に点てた抹茶を使用した宇治抹茶ラテ 486円(税込)

（値段は令和元年 9 月現在）

INFORMATION

表紙の写真から

第１号の表紙に使用した写真は、当館のメイン展示「漱石山房の書斎再現」です。洋間10畳の板の間中央にはペルシャ絨毯が敷かれ、漱石が座る位置に紫檀製の文机。白磁の火鉢がかたわらに置かれています。上部に掛けられている扁額「移竹楽清陰」は漱石自身の書ですが、これは没後に掛けられたものです。家具や調度品類のうち、文机・飾り棚・絨毯・竹腕枕・ペーパーナイフ・文箱２つ・寒山拾得図などは、夏目家からの寄贈を受けた県立神奈川近代文学館が所蔵している資料の複製です。書棚の洋書は、弟子の小宮豊隆が戦時中に東北大学附属図書館に移した蔵書群、「漱石文庫」から複製資料を製作しています。書斎の再現は、両館の協力や教示により実現したものです。漱石は、この書斎で亡くなるまでの９年間、執筆活動に勤しみ、数々の名作を生み出しました。手前の客間は、毎週木曜日の午後に面会客や弟子たちが集まる場所となっていました。さあ、客間から書斎を覗いてみましょう。漱石先生の声が聞こえてくるようです。「今日はどうしたね？」

編集後記

令和元年９月24日に開館２周年を迎えるにあたり、漱石山房記念館の活動をより多くの皆さまに知っていただけるよう、漱石山房記念館だよりを創刊しました。表紙のデザインに使用した原稿用紙は新宿区の所蔵資料を元に作成したものです。

特集記事「対談 漱石山房記念館２周年によせて」の収録の合間には、漱石山房記念館の今後について多くのアイディアが飛び出しましたので、実現に向けて取り組んでまいりたいと思います。

また、開館以来２年間に漱石山房記念館で開催した特別展について、あらためて報告をまとめました。今後も「活動報告」のコーナーでは、展示やイベントの報告をしてまいります。特別展および通常展テーマ展示を開催するにあたり、ご協力賜りました関係者の皆さまには、深く御礼申し上げます。

この漱石山房記念館だよりは今後も定期的に発行する予定です。親しみやすい誌面を目指してまいりますので、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

令和元年９月～12月 イベントカレンダー

※要事前申込のイベントは当館ウェブページ等をご覧ください。

9月

18日（水）～11月24日（日）
《特別展》救い出された文学コレクション ―亘理町（わたりちょう）・江戸家資料の世界―

22日（日）14時～16時
開館２周年記念講演会　いま漱石が面白い 主要な漱石作品を読みなおす
講師：小森陽一氏（東京大学名誉教授）　※募集終了

23日（月・休）10時～無くなり次第終了（先着100名様）
開館２周年記念品（ポストカード）プレゼント

29日（日）13時30分～
東京朝日新聞連載小説『虞美人草』読解＆朗読
読解：佐藤裕子氏（フェリス女学院大学教授）、コーディネーター：牧村健一郎氏（元朝日新聞記者）、朗読：葉月のりこ氏（朗読家）　主催：鎌倉漱石の會　※要事前申込

10月

12日（土）14時～16時30分
一日館長イベント（一日館長任命式、記念館内視察、来館者お出迎え、講演会「漱石先生の魅力」）
一日館長：出久根達郎氏（作家）　主催：新宿区文化観光課
※講演会は募集終了

19日（土）14時～16時
文学連続講座　「三四郎」から「それから」へ～西洋・日本・東京・故郷を考える～
第１回：「三四郎」：問題の発見・追求・混迷 ～「三四郎」のそれから～
講師：大野淳一氏（武蔵大学名誉教授）　※要事前申込

26日（土）14時～16時
特別展記念講演会①
木曜会が生んだ『文鳥』―暗示のリレーとは何か―
講師：佐々木英昭氏（文筆業、元龍谷大学教授）　※要事前申込

11月

9日（土）14時～16時
九日会　第３回　読む、見る、描く。漱石と美術の熱い関係
講師：古田亮氏（東京藝術大学大学美術館准教授）
主催：新宿区文化観光課　※要事前申込

10日（日）14時～15時30分
特別展記念講演会②　亘理町の文化財レスキューと亘理町の未来
講師：田沢裕賀氏（東京国立博物館学芸研究部長）他　※要事前申込

16日（土）14時～16時
文学連続講座　「三四郎」から「それから」へ～西洋・日本・東京・故郷を考える～
第２回：「それから」：問題の継承・発展・拡散～「それから」のそれから～
講師：大野淳一氏（武蔵大学名誉教授）　※要事前申込

17日（日）14時30分～16時
鶴巻図書館×漱石山房記念館「大人のための朗読会」～酒と文豪～
朗読：ぐるーぷ・カナリヤ　主催：新宿区立鶴巻図書館

23日（土）14時～17時
漱石と落語（三遊亭円朝生誕180周年）（仮題）
主催：新宿区文化観光課　※要事前申込（於四谷区民ホール）

12月

3日（火）～2月24日（月・休）
《通常展》テーマ展示　高浜虚子没後60年記念『吾輩は猫である』が生まれるまで（仮題）

9日（月）漱石忌（夏目漱石命日）

Access

【電車】
東京メトロ東西線「早稲田駅」１番出口より徒歩10分／都営地下鉄大江戸線「牛込柳町駅」東口より徒歩15分

【バス】
都営バス（白61）「牛込保健センター前」より徒歩２分

※駐車場はございません。公共交通機関をご利用ください。

- 所在地…新宿区早稲田南町７番地
- 休館日…月曜日（月曜日が休日の場合は、直後の休日でない日）
  12月10日（火）
  （ただし12月９日（月）は開館）
  12月29日（日）～１月３日（金）
- 開館時間…10時～18時
  （入館は17時30分まで）

新宿区立漱石山房記念館　TEL：03-3205-0209　https://soseki-museum.jp/
編集・発行　新宿区立漱石山房記念館（公益財団法人新宿未来創造財団）